

<翻訳>フリードリヒ・リストの「世界は動く」について

著者	ヴェンドラー オイゲン, 原田 哲史
雑誌名	経済学論究
巻	68
号	3
ページ	605-623
発行年	2014-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/13434

〈翻訳〉

フリードリヒ・リストの 「世界は動く」について*

On Friedrich List's "Le monde marche" (I)

オイゲン・ヴェンドラー
原 田 哲 史 訳

This is the Japanese translation of Eugen Wendler's explanation of Friedrich List's prize essay "Le monde marche". This essay of List's about modern productive powers and transport systems, such as the steam engine and railways, is one of his two prize essays which were written in 1837, in vain, for two prize categories of the "Académie des Sciences Morales et Politiques" in Paris. The full text of „Le monde marche“ had been missing and was discovered in 1983 by Wendler.

This first part of the Japanese translation of the Wendler's explanation includes its first to fourth sections.

Tetsushi Harada

JEL : B15, B19

キーワード : フリードリヒ・リスト、生産諸力、蒸気機関、鉄道、道徳科学・政治科学アカデミー

Keywords : Friedrich List, productive powers, steam engine, railway, Académie des Sciences Morales et Politiques

* 本論文は、現在ドイツにおいてフリードリヒ・リスト研究をリードするロイトリンゲン大学名誉教授オイゲン・ヴェンドラー氏 (Eugen Wendler) による、同氏編フリードリヒ・リスト『世界は動く——蒸気力と新輸送手段が諸国民の経済・市民生活・社会構成・力量に及ぼす作用について (1837年のパリ懸賞論文)』(Friedrich List: Die Welt bewegt sich: Über die Auswirkungen der Dampfkraft und der neuen Transportmittel auf die Wirtschaft, das bürgerliche Leben, das soziale Gefüge und die Macht der Nationen (Pariser Preisschrift 1837), Göttingen 1985) の解説文 (S. 11-59) の邦訳である。邦訳はヴェン

1. はじめに

他の場合には仮借なく非難をあびせるカール・マルクスも、一世代上のフリードリヒ・リスト [1789～1846 年] に対しては気配りが見られ、経済学的にはリストがマシュー・ケアリーとならぶ「一九世紀最大の天才」¹⁾ であるとするオイゲン・デューリンクの評価を手放しでフリードリヒ・エンゲルス宛の手紙で伝えているし、エンゲルスもまた別の個所で歩調をあわせて、リストが「いまなおドイツのブルジョワ経済学の文壇が生み出した最高のものである」²⁾ と記している。にもかかわらず、戦後の経済史研究においてフリードリヒ・リストの経済学説が論じられたのはほんのわずかであった。この怠慢は、パウル＝ハインツ・ケスタースが通俗学的な研究『経済学者たちが世界を変える』³⁾ で重要なドイツの経済学者たちとその諸理論を紹介する際にもフリードリヒ・リストについて何も言っていないことを一見するだけで明らかである。こうした状況は、リストがドイツ語圏で一番有名な経済理論家・経済政策家であったことからすれば理解しがたい。リストはその発展政策思想において並外れた先見の明を示していたし、政治的統一の前段階としてのドイツ関税同盟の設立とドイツの鉄道網の建設とにすべてを投げうって献身したのであり、それとともに、遠い未来のヨーロッパ共同体と新しい流通・通信手段を照らし出すほどの展望を切り開いていたのである。

フリードリヒ・リストのライフワークの研究において 130 年ほど前から、こ

ドラー氏の同意を得ている。もとのタイトルは「懸賞論文の歴史と解説」(Geschichte und Kommentierung der Preisschrift) であるが、邦訳では分かりやすいように「フリードリヒ・リストの「世界は動く」について」とした。訳文中の圏点は原著者による強調であり、[] による挿入は原則として訳者による補足である(ただし例外の場合はそのつど注記する)。頻出の概念“Vehrkkehr”はおもに「流通」と訳したが、それで意味が通りにくい箇所では「運輸」ないし「交通」とした。なお、訳稿は一部分で中川洋一氏による下訳を参考にした。訳文におけるすべての責任は訳者にある。本研究は JSPS 科学研究費 23243036 の援助を受けた。——訳者

- 1) Marx, K.; F. Engels: Briefwechsel, Berlin 1950, Band IV, S. 26; zit. aus: Fabiunke, G.: Zur historischen Rolle des deutschen Nationalökonom Friedrich List (1789-1846), Berlin 1955, S. 29.
- 2) Engels, F.: Zur Kritik der Politischen Ökonomie, in: Marx, K. und F. Engels: Ausgewählte Schriften in zwei Bänden, Band 2, Berlin 1952, S. 342.
- 3) Siehe Koesters, P.-H.: Ökonomen verändern die Welt.

の「最高に有能でありながら誤解されることの多かった」⁴⁾ 経済学者が 1837 年のパリ亡命時代に取り組んだ道徳科学・政治科学アカデミーの懸賞課題はひとつであったかふたつであったか、つまり懸賞審査委員会に審査を求めて提出された彼の論文は 1 本だったか 2 本だったか、ということについて考えがめぐらされてきた。

ふたつめの懸賞課題に関するリストの紛失原稿は筆者が 1983 年 10 月 25 日にフランス学士院の文書保管所で発見したので、それでもってこの争点については明確な答えが与えられることになった。

この作品をめぐる諸状況やその内容に立ち入るまえに、フランス学士院の実務院長である永年書記ベルナル・シャノー氏にはそれを自由に利用させていただいたことに、またラフィット＝ラルノディ女史にはその原稿の発見と写真撮影において多大なご助力をいただいたことに、心からの感謝の意を表したい。同じく愛妻クリストゥルにも、この仕事を我慢強く見守ってくれたのみならずタイプ打ちをしてくれたことに感謝している。

2. フリードリヒ・リストの生涯・活動の軌跡、ならびにその知的遺産の核心

フランス革命勃発の 1789 年に当時の帝国直属自由都市ロイトリンゲンに生まれたフリードリヒ・リストは⁵⁾、14 歳までラテン語学校に通ってから、父の仕事の白糶で 3 年間の修業を終えた後すぐに中級公務員の職についた。彼はこの仕事をするなかで、当時のヴェルテムベルク王国の行政における弊害を見

4) Weber, G.: Lehrbuch der Weltgeschichte, Zweiter Band, 18. Auflage, Leipzig 1879, S. 785.

5) Vgl. Wendler, E.: Friedrich List — Leben und Wirken in Dokumenten, Reutlingen 1976; dergl.: Friedrich List — Stationen eines wechselvollen Lebensweges, in Mitteilungen des Instituts für Angewandte Wirtschaftsforschung, Tübingen, 4. Jg., Nr. 3, 1976, S. 11-23; dergl.: Friedrich List — NB-Forscherportrait, in: Neue Betriebswirtschaft, H. 7/1979, S. 417-419; dergl.: Reutlingen und Friedrich List, Reutlingen 1983, Gehring, P.: Friedrich List, Jugend- und Feifejahre, 1789-1825, Tübingen 1964; Henderson, W.O.: Friedrich List — Economist and Visionary, 1789-1846, London 1983.

知った。彼は大学入学資格を有することなく聴講生としてテュービンゲン大学の法学の諸講義を聴講しただけであったが、1817 年国王ヴィルヘルム 1 世はリスト主導で設立された同大学国家学部に彼自身を国家行政実務の教授として招聘した。

たまたまフランクフルトに滞在していた 1819 年 4 月、彼はドイツの諸領邦間の経済的・政治的分裂状態に反対して内国関税の廃止と自由な国内市場を求めて闘う「ドイツ商工業協会」を設立した。そうした経済同盟こそドイツの政治的統一の前段階をなすべきものだと言ったのである。こうしたリーダーシップについては国王の目からすれば望まれなかったものであり、その結果、彼は国家勤務から解雇されてしまった。

1820 年、彼は故郷ロイトリンゲンの市民たちによって、議員としてヴェルテムベルク領邦議会に送り込まれた。この資格において彼は、激烈に書いた「請願書」でもって——といっても実際には匿名のビラといった性格のものであったが——ヴェルテムベルク行政における由々しき欠陥・不正と身分制国家の社会的な未成熟とに対して批判した⁶⁾。リストの告発の極みは、弊害の除去のために政府が行うべき 40 もの要求に見られる。このような強い非難のため、たった 2 か月だけで領邦議会から締め出され、相応の役務とともに 10 か月の城塞禁固刑に処するという判決が下った。この場合、刑罰のウェイトは刑期にではなく、「相応の役務とともに」と追記された名誉剥奪にあったのであり、それゆえリストはそれ以来政治的迫害を受ける身となり、安住の地のない亡命者とならざるをえなかった。彼はスイス亡命期には様々な仕方でも政治的な名誉回復に努めたが、そうした試みはすべて無に帰した⁷⁾。しかしながら彼の弁明書「テミス II」は、ハレで発行されていた 1824 年の『一般学芸新聞』における匿名の書評においても、最高の敬意が払われて次のようにコメントされている。「ここでの想念はまさに崇高なのである。というのも、その最高の崇高さを揺るがすような表現はどこにもなく、それどころか、それはまさに一方で国家元首の公正さへの信頼に基づいており、他方で事柄の真実を主張する極めて

6) Vgl. Wendler, E.: Leben und Wirken von Friedrich List..., S. 16 ff.

7) Vgl. Wendler, E.: Leben und Wirken von Friedrich List..., S. 158 ff.

明確・的確な議論に、すなわち国家元首の公正さに反して下された判決の決定理由を照射する議論に基づいている。人々は偏見で目がくらんでさえいなければ、善意の情熱の犠牲となったその人を気の毒に思わざるをえないし、彼の行いに賛意を表せざるをえない。」⁸⁾

リストはまず逃亡によって拘禁から逃れることを試みた。しかしアルザス、バーデン、スイスを——またパリとロンドンへの小さい寄り道もして——2年間さまよったのち、再びヴェルテムベルクに帰った。彼が望んだ国王による恩赦はやはりかなわなかった。帰郷直後に彼は拘束され、拘留に服するためホーエン・アスペルクに連行された。アメリカに移住することを約束して初めて、刑期終了前に釈放された。

この新世界でリストは6年間過ごした。まずは農場経営者になろうと試み、その後ドイツ語新聞『デア・レディンガー・アドラー』の編集を引き継ぐことができたが、ペンシルヴェニアのポッツヴィル付近で大きな石炭鉱床を発見して、世界初の鉄道のひとつである、彼の発見した石炭鉱脈からの運搬のために作る鉄道の共同設立者かつ共同所有者になった。このプロジェクトの計画・実行において彼は貴重な経験を得ることができたのであり、この経験こそ彼をして新世界・旧世界を通じての最初の鉄道先駆者のひとりにならしめたのである。それに加えて彼はアメリカをモデルとして、イギリス流の経済自由主義と、経済的にまだ遅れた状態にあった諸国の保護関税政策との対立を学んだ。これについての議論は1827年の彼の『アメリカ政治経済学概要』に著わされている。

リストはアメリカ合衆国で名声と富を得たけれども、郷愁が彼を郷里ドイツへと駆り立てた。したがって、1830年10月27日のアメリカ国籍取得の後にジャクソン大統領が彼をハンブルクの、その後バーデンの、最後にザクセン王国のアメリカ領事として任命したことは、彼にとって絶好のチャンスであった。もっとも、かつての政治犯に当時なお向けられ続けた冷酷な拒絶反応のため、彼はこの職務をほとんど遂行することができなかった。その代わり彼は、

8) o. V.: Themis, eine Sammlung von staatswissenschaftlichen Abhandlungen, Übersetzungen und in die Politik einschlagenden Rechtsfällen, in: Allgemeine Literatur-Zeitung, Nr. 220, Halle 1824, S. 94.

並外れた行動力でもってドイツの鉄道網の建設のために闘ったのである。疲れ知らずに働く彼はとりわけライプツィヒ・ドレスデン間のザクセン鉄道の建設に深く関与したのであるが、鉄道会社の幹部としての地位を望んだにもかかわらず、それも得られなかった。同じように——しかも同様の不成功をとまなつて——彼はマンハイム・バーゼル間のバーデン鉄道の建設にも尽力した。

あれやこれやの失敗のため、もう 48 歳となった彼は今度はフランスで運を試そうとした。1837～39 年パリに 3 年間亡命した彼は、道徳科学・政治科学アカデミーの——まさに本稿で我々が関心を寄せている——懸賞課題に応募したのである。またその時期には他にも数多くのジャーナリスティックな寄稿を書いていた。

ドイツに再度戻った彼には、1840 年チューリングゲン鉄道制度に関する功績が称えられてイエーナ大学法学部から名誉博士号が授与された。

さらに精神力の成せるわざとして、ほぼ無一文の彼が経済学上の主著『政治経済学の国民的体系』を完成させたことが挙げられるが、この著作は彼の生前に 3 つの版が出され、時の経過とともに数カ国語にも翻訳された。

その後オーストリア・ハンガリーとイギリスに旅するのであり、彼はそこで職業的にも政治的にも成功することを期待していた。リストは彼特有の洞察力でもって、イギリスの経済的優位がもう長く続かないことを予測していた。だからこそ彼は自ら思い立って、独英協商へと尽力したのである。彼がイギリスの首相ロバート・ピールに提出した報告書「大ブリテンとドイツとの同盟の価値と諸条件について」において、彼の「将来への政策」はその頂点に達している。そうした同盟はイギリスにとって経済的な優勢を守る手助けとなるであろうし、ドイツにとっては 1834 年の関税同盟によってなされた経済統一の後になすべき生産諸力の増強と政治的統一の実現を容易にするであろう、というのである⁹⁾。

しかし、確固たる成果なくしてこのようにさまよっていたため、疲れ知らずに見えたりストの余力も完全に消耗してしまった。精神的にも肉体的にも病的

9) Vgl. List, F.: Über den Wert und die Bedeutungen einer Allianz zwischen Großbritannien und Deutschland, S. 267 ff.

となった彼の状態は極度に悪くなり、そこから抜け出す手立てもなく絶望的となった彼は、1846年11月30日オーストリア国境の町クーフシュタインで自らの命を絶った。

リストは慌ただしい人生を過ごしたが、豊かな諸著作の総体を生み出すことができた。それは1000タイトル以上にもなるが、その重要なものは10巻本の全集に収められて、注解がほどこされてもいる¹⁰⁾。

リストはたしかにカール・マルクスのような突出した理論家ではなかったが、実践家であった。しかも、「政治経済学について読むことのできる最良の作品は生活と実践の現場とである」といった認識にアメリカ合衆国で到達した実践家であった。まさに彼特有の強みは、非常に複雑な事柄・関係を手短かつ的確に文章化することであり、そこから遠い未来にまで届くような結論を引き出すことであった。

テーマとして多岐にわたる彼の諸論稿で扱われたのは、その時代における最も切迫し最も関心の高かった諸問題や発展諸傾向であって、彼はまさに目に見えるような生き生きした言葉遣いでそれらを描いた。そうした諸論稿は国家政策・経済学・流通政策・ジャーナリズムという4つのテーマ群に分けることができる。彼の国家政策思想はなかでもドイツの領邦諸国家——なかでもヴェルテルンベルク王国——の自由化と民主化と、領邦諸国家の経済的・政治的な統合とをめぐるものであった。歴史的に生成した個別経済と総体経済の¹¹⁾基礎的諸事実から彼が導出した経済学の思想は何よりも、経済的に遅れた諸国が社会的・政策的に動機によって産業化する際の経済的条件に関するものであったし、イギリスの産業的優位に迫っていく可能性に関するものであった。それ以外にもリストは、いわゆる「商業学の衰退期」にありつつも突出した基礎的な経営学の思想構築をなすことができた¹²⁾。流通政策のための彼の様々な行動は、一定の地理的空間を交通手段によって開発することこそ産業化と経済成長にとっても国民の社会的な繁栄にとっても決定的な意味をもつという確信からな

10) Vgl. List, F.: Schriften/Reden/Briefe, Band I-X, abgekürzt: Werke.

11) Vgl. Sommer, A.: Friedrich Lists System der politischen Ökonomie.

12) Vgl. Wendler, E.: Das betriebswirtschaftliche Gedankengebäude von Friedrich List.

された。教育政策・技術・地理・歴史に関する諸論稿も加わって、多層にわたる諸著作全体は整ったものになっている。

リストの思想構造の前面に位置するのは生産諸力の理論であり、また生産諸力の理論と価値の理論との相違である。生産諸力の理論という概念でもって彼が理解するのは、数多くの諸要素によって規定され形作られる、質的にかなり異なった事柄の複合している現象である。そこに含まれるのは社会政策的・総経済的な複数の作用諸要素であり、それは国家の法律、国家の公的な諸制度、学問と技術、芸術と教育、人間・所有の安全、人間の自由、農業・商業・産業という 3 つの経済要素の調和的な相互作用といったものである。

生産諸力とはその総体において「効力があり、生産に」貢献する「諸力ないし諸能力」をなすものであるが、「生産されて交換対象として」役立つ「物それ自体」は商品と見なされる。生産諸力とは経済・経営の樹木であって、「そこにおいて富が育つのであり、また果実をもたらす樹木こそ果実自体よりも価値がある」のだから、価値の理論〔果実としての商品に価値を見出す理論〕は生産諸力の理論よりも下位に置かれるべきである¹³⁾。しかしながら両理論の間には内的な連関がある。価値を生み出すためには生産諸力が供されねばならないが、生産諸力を増強するためには価値が供されねばならない。ただし、生産諸力の増大というものは〔商品の増大とは異なり〕常に直接的に感じ取れるものではない。それは「しばしば後続の世代での生産の成長を通じて初めて——またはもっと後のこともあるが——看取できる。」¹⁴⁾ このことから、リストが生産諸力の増大を長期継続的な——永続的でもありうる——プロセスとして理解していたことが、結論付けられる。

そうした生産諸力の概念は、それでもって理解しうる作用力が演算のように定義できないので曖昧であると批判する著者らもいるのであるが、この理論こそ、現代の政治的・経済的な展望にとって価値ある刺激的思考を導き出しうる様々な精神的な洞察を与えてくれる。戦後において個別経済的にも総体経済的にも販売思考ないし成長思考が、それとともにまた諸価値の理論が、経済的

13) List, F.: Das Nationale System der Politischen Ökonomie, S. 81.

14) List, F.: Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, S. 192.

な目的観念を支配している。しかしエネルギー経済での供給が長期的に保証されるべきであり、環境汚染が大幅に低減されるべきであり、資源消費が限界に留められるべきであり、国際的な発展の格差が縮められるべきであり、ドイツ経済の国内および国外での経済的な業績力が長期的に維持されるべきだとすれば、リストの生産諸力の理論のこの時代になかった解釈を考え出すことこそ、最も時宜にかなっていると思われる。

3. パリ亡命の最初の局面、ならびに道徳科学・政治科学アカデミーの懸賞課題

フリードリヒ・リストの政治的名誉回復は、1836年4月15日にヴェルテムベルク国王ヴィルヘルム1世によって、リストの「国家市民的諸関係については、彼には名誉回復が必要ないのであり、名誉回復したところで彼に何らかの利益がありうるわけでもない」¹⁵⁾ という理由で最終的に却下された。さらにライプツィヒ・ドレスデン鉄道会社の幹部の空きポストへの応募も1837年6月29日に却下されたので、その後の彼にはヨーロッパの外国に亡命する可能性しか残されていなかった。

そのためにはフランスで最善の見通しが開けているように思われたので、彼は1837年の後半にパリに移住することを決心した。彼は、フランスの首都で言葉と音楽のさらなる勉強のため寄宿生活をしていた長女のエミーリエ（1818年12月10日～1902年12月14日）によって鶴首して待たれていた。

彼は旅行で通過したベルギーで、最高の政治的官職にある人々によって多大な敬意でもてなされた。「フリードリヒ・リストほど「予言者は自分の故郷では敬われない！」という格言が的確に当てはまる人はいない。彼はドイツ連邦の境界の杭を通り過ぎたところでいつも喝采と承認を得た。」¹⁶⁾ そうしてベルギー王は彼に従妹のフランス王ルイ・フィリップ宛の推薦状を持たせたのである。ベルギーの鉄道大臣ノンは、1837年9月10日に落成したメヒルン・

15) König Wilhelm I: Schreiben an das Justizministerium vom 15. 4. 1836; Werke VIII, S. 474.

16) Wendler, E.: Friedrich List — Leben und Wirken in Dokumenten, S. 22.

ルヴァン間の鉄道路——ベルギーで最初のブリュッセル・メヒルン間の鉄道を 50 キロ延長したそれ——の開設式典に招待するという榮譽でもって、彼を厚遇した。

フリードリヒ・リストがさらにベルギーからフランスへと旅行した正確な日時や、いつからパリで宿泊したかについては、これまで知られていなかった。これまでのリストの伝記はどれも「9 月末から 10 月初めまで」という不確かな期間を示すだけで良しとせねばならなかった。ようやく最近になって、筆者はこの問いにかなりの確に答える——これまで知られていなかった——書簡に出くわした。それはリストが 1837 年 10 月 7 日パリから出した、ライプツィヒ出発前に彼によって領事代理に任命されたヨハン・ゴトフリート・フリューゲル博士（1788～1855 年）に宛てた書簡であり、そこで彼は以下のように伝えているのである。「私の妻がこの間にライプツィヒを発っているのかまったく分らないので、同封する手紙を親愛なる博士、あなたに送りますが、それを妻に渡すかさらに送るかしてください。同じく、取り組んでいる原稿をトイプナー印刷所に送付することもお願いします。もしあなたが私に何か書き送るものがあつたら、ヴィヴィアン通りのホテル・ヴィヴィアン宛に送ってください。立て替えた郵送料は請求してください。」

この書簡の内容を、1837 年 9 月 21 日にブリュッセルからエミーリエに宛てた「10 月 1 日～5 日の間より前には」パリに到着しないと思うという内容と比べ合わせると、パリ到着は 1837 年の 10 月 6 日か 7 日であったと言ってよいであろう。また宿泊先が記載されていることも、我々の問題を考えるうえで非常に有益である。

パリに到着後間もなくリストは、道徳科学・政治科学アカデミー Académie des Sciences Morales et Politiques が 1837 年 12 月 31 日を提出期限とするふたつの懸賞課題を公にしたことを耳にした。

そのアカデミーは、世界的に有名な「フランス学士院 Institut de France」を構成する 5 本の柱のひとつをなすものである。学士院はフランスにおける学術・芸術に関する最高の国立の団体であり、1795 年に総裁政府によって、あらゆる学術上の発見を収受して学術・芸術を洗練する目的で設立された。フラ

ンス学士院は、次のような複数のアカデミーによって構成されている。

- (1) アカデミー・フランセーズ、1635 年設立
- (2) 碑文・文芸アカデミー、1663 年設立
- (3) 科学アカデミー、1666 年設立
- (4) 芸術アカデミー、1816 年設立
- (5) 道徳科学・政治科学アカデミー、1832 年設立

今日では道徳科学・政治科学アカデミーは哲学、政治学、法律学、経済学、歴史・地理学という 5 つの部門で構成されており、全体として 40 名の正会員、6 名の自由会員が属している。

5 つのアカデミーはいずれも、それ自体の会合や独自の懸賞課題をもち、独立の賞を授与する団体なのである。

道徳科学・政治科学アカデミーのふたつの課題は、まるでフリードリヒ・リストを念頭に置いていたかのようであり、彼の国民経済的・流通政策的な関心領域とまさに一致するものであった。ふたつの懸賞課題の文言は以下とおりである。

- (1) 「一国民が自由貿易への移行を企図するか自らの関税立法の変更を企図する場合、生産者の国民経済上の利益と消費者の国民経済上の利益とを可能な限り公正な仕方では致させるために、その国民はどのような事柄を考慮しなければならないか。」
- (2) 「旧世界 [ヨーロッパ] と新世界 [アメリカ] で現在普及しつつある蒸気力と輸送手段は、経済・市民生活・社会組織ならびに諸国民の国力にどのような影響を与えるか。」

懸賞課題はふたつとも 1836 年 12 月 28 日のアカデミーの公式年次会合で作成され、公示された。前者については 3000 フラン、後者については 1500 フランの賞金でもって、受賞者にフランスでの最高の名声が待ち受けていた。「アカデミーの王冠」取得者には、レジオン・ドヌール勲章を得た騎士のように、あらゆる門戸が開かれていたのである。その代わり科学アカデミーは最大級の要求を課していた。

リストは最初、かろうじて自由になる時間をもってしては懸賞課題に取り組

むのは無理だろうと考えたのだが、1837 年 11 月中頃——日にちはもはや特定できないが——つまり提出期限のおよそ六週間前になってなお懸賞課題の両方に取り組もうと決心したのである。

4. 懸賞論文がふたつ存在したことの証明

リストがふたつの懸賞課題のうち少なくともひとつに取り組んだということは、ひとつめの懸賞課題についての原稿がアウトウール・ゾマーによってフランス学士院の文書保管所で発見された 1926 年以来、証明されている¹⁷⁾。その原稿は「政治経済学の自然的体系」¹⁸⁾ という標題が付されて、リストの思想・行動に特徴的な標語「郷土も人類も」で始められている¹⁹⁾。

それ以来、ふたつめの原稿を探す尽力が、徒労であるかのようになされてきた。アルトウール・ゾマーは、ひとつめの懸賞論文の発見についての報告のなかで、「我々はフランス学士院所蔵の文書類において、ふたつめの懸賞課題とありうべきリストのふたつめの作品という問題について可能な限り探究してきたし、これからも彼の懸賞応募作品を細心の注意を払って探し求めるであろう。たしかに問題の原稿それ自体が発見されるまでには至っていないけれども、それがなお存在している可能性はあるのだから」²⁰⁾ と述べている。

同時にゾマーは、ひとつめの懸賞論文の提出期限や表彰について調べるなかで、「リストが 6 週間で、既発見の論文に加えてもうひとつの作品をも同じ獨創性でもって書き、かつ翻訳したということは不可能である」²¹⁾ と結論付けていた。しかし、である。「我々が忘れてはならないのは、相互に矛盾する複数

17) Vgl. Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Fridrich Lists, S. 687-718.

18) Vgl. Salin, E. und A. Sommer: Friedrich List - Das Natürliche System der Politischen Ökonomie; Werke IV; Fabiunke, G.: Friedrich List: Das Natürliche System der Politischen Ökonomie; Henderson, w. O.: Friedrich List: The Natural System of Political Economy.

19) Vgl. Wendler, E. : Das betriebswirtschaftliche Gedankengebäude von Friedrich List, S. 96 f.

20) Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk, S. 691.

21) Ebenda S. 701.

の証言があるなかで、それでもリストがこの懸賞課題に対する応募論文を本当に書いたかどうかについての確定が今日なおできないことである。原稿はフランス学士院で見つかっていないし、それへの明確な答えを下すことを可能にするようなバリ滞在期の書簡がさらにあればよいのだが、現在そうしたものもない…。したがって我々は、ふたつめの懸賞論文の存在を想定する根拠はあるのか無根拠なのか明らかにすることさえ、幸運と将来の研究者とに委ねるものである。」²²⁾

問題の原稿がこの間に行方不明となった後、ふたつめの懸賞論文の存在がいろいろと疑われてきた。例えば、オットー・ボルストの著作『隠れた反逆者』では、疑念に満ちた言及が見受けられる。リストについては「彼自身を信じてよいとすれば、彼は同時にふたつの懸賞論文に並行して取り組み、まるで自分の蠟燭の両端に火を灯すようである」と書かれており、少しあとで「彼の懸賞論文、すなわち失敗に帰したそれ」と言われてもいる²³⁾。1983年にひとつめの懸賞論文を英訳した W.O. ヘンダーソンも、ふたつめの懸賞論文の存在を否定している²⁴⁾。

しかしながら、リストが両方の懸賞課題に取り組んだことを明白に証明する様々な資料が存在する。彼は 1837 年 11 月 22 日にパリから妻のカロリーネに宛てて次のように報告している。「エミーリエは昼も夜もぼくと一緒だったよ。ぼくが口述して、あの子が書き写す。あの子は綺麗に正確に書くし、フランス語文法を根本から理解してるから、今ぼくとあの子が一緒になって複数のフランス語の大論文を書いてるんだ。ぼくたちは来年の 1 月 1 日には終えなくてはならないふたつの懸賞課題に取り組み始めた。もしぼくがずっと健康ならそれを仕上げることができるだろうし、仕上げることができれば賞金 (3000 および 1500 フラン、つまり計 4500 フラン) を獲得することになり、賞金を獲得すればドイツにいるライバルを超える大勝利を——しかもドイツでもフラン

22) Sommer, A.: Mitteilung ..., S. 701 f.

23) Borst, O. : Die heimlichen Rebellen – Schwabenköpfe aus fünf Jahrhunderten, S. 122 u. S. 139.

24) Henderson, W. O.: Friedrich List: The Natural System..., S. 1-13.

スでも良い結果をもたらすに違いない大勝利を——喜び祝うことになるんだ。このところぼくは毎日 15 時間以上も取り組んでるよ。」²⁵⁾

1838 年 1 月 1 日、リストは妻に宛てた別の書簡で、より詳細にふたつの懸賞論文について言及している。「ぼくたちはここで大晦日の晩にしゃれた宴会をした。朝の 4 時になってようやく床についたんだ。つまりぼくは仕事を終えたのだ、——ふたつの懸賞課題への回答論文がここにできているんだよ、しかも自分なりに完全に満足する出来ばえでね。この作品については、それなりに分厚い 2 冊の印刷本に相当することになると言えば、きみも想像することができるとね。これはすべて 6 週間で書き上げて、翻訳して、注釈を加えたものなんだ。そのために 30 冊を超える本を読む必要があったけれど。午前 1 時から 2 時から 10 時までそれに取り組んで、それから 3 時まで図書館に行く、そしてもう一度 5 時半まで机に向かい、7 時か 8 時に就寝する。これまで生きてきたなかでこの仕事ほど順調に進まなかったことはないし、これほど体調をくずして取り組んだものはなかった。それでも最終段階ではベッドに行かず何時間かだけ寝ただけだった。ぼくはふたつの懸賞を、いや最低でもそのひとつは獲ることを期待してるよ。そうなれば、本屋がその本にどの程度の価値を見積もるか考えると、10000 フランものお金を得られるんじゃないかな。しかもその本が工場経営者たちの間で有名になって版を重ねることにでもなれば、その 3 倍にも 4 倍にもなりうるよ。とはいっても、この作品はすごく早く片付けないといけなかったこともあるから、自分の期待は裏切られることもありうるけどね。賞を与える審査員たち（名前は受賞の後にやっと分かることになる）が、ぼくの 2 論文が最善のものなのに、ぼくに賞を与えないこともありうる。つまりぼくには新しい体系があるけれど、審査員たちはまだ古い信念にとらわれているんだから。いずれにしてもぼくの 2 論文は製本されることになるし、それでもってアメリカのとき（1828 [鉄道敷設の認可]）と同じ成功を収める見込みがあるんだ。これで充分だし、どれかひとつの道筋で良い結果に至るにちがいないんだ。

25) List, F.: Brief an seine Frau Karoline vom 22. 11. 1837, S. 499.

ぼくがこの仕事をしていた間は国王・大臣・旧知の人たちとの手紙のやり取りをぜんぶ棚上げして、後回しにしないといけなかったのは、1分も無駄にできなかったからだよ。劇場に行くこととか、新聞を読むといったことさえ考えられなかった。それ以来、世間で何があったのかほとんど知らないんだ。けれど、ぼくとエミーリエは近くや遠くに行つてちよつと運動しようということ、外のレストランで食事はしてたけどね。」²⁶⁾

この手紙は2週間がたつてようやくリストによって発送された。彼は手紙の裏で発送を渋った理由について言っている。「この手紙は1月1日に発送しようと思つていたんだけど、13日間もそのままにしてしまった。というのも2つの懸賞課題の原稿を提出したとき、まだ8日間も時間があることを聞いたんだ。だからぼくは、推敲するために原稿を取り返して、さらに8日間これまでも同じように仕事を続けたよ。1月8日に提出したときは、ありとあらゆる手紙や仕事、沢山の来客をこなしたり、私用も片付けたりということをややうほどしないといけなかった。そして今日ようやく手紙にたどり着いたというわけなんだ。」²⁷⁾

したがって、引用した手紙の諸部分からリストが両方の懸賞課題と取り組んだことが明らかに読み取れる。しかしそれは、彼がその後例外なく口外していない事実なのである。というのも、彼は他方で、複数の手紙や出版物において「自然的体系」について、つまりひとつめの懸賞課題について関与したことを証言しているのであるが、そうした証言のなかでもつねに道徳科学・政治科学アカデミーのひとつの懸賞課題のみ語られているのである。このことを心理学的に説明するなら、彼は想像を絶するほどの精神的・心理的な労苦をもつてもあのような結末となつたことに心底失望したのである。あらゆる願望・幻想が突如崩れ去つたことは彼の心の根幹に衝撃を与え、二度と忘れえないトラウマが残つた。ひとつめの懸賞論文については、かろうじて人に言うこともできた。というのも、たしかに賞を得るには至らなかったが「優れた作品」として、つまりベストスリーのひとつとしてランク付けられたとともに、提出者の

26) List, F.: Brief an seine Frau Karoline vom 1. 1. 1838, S. 501 f.

27) dergl.: Brief an seine Frau Karoline vom 13. 1. 1838, S. 503.

誰も受賞しなかったからである。

彼は 1841 年の『政治経済学の国民的体系』の序文において、自分がどれほどアカデミーの決定に失望したか、いや、どれほど傷付けられたかを隠さず言っている。痛めつけられた自尊心を癒すように、彼はその記述を少し都合よく書いている。痛めつけられた自尊心を癒すように、彼はその記述を少し都合よく書いており、原稿の作成に要した期間を「およそ 14 日間」と短く記している。また同じく、彼はこの作品が賞に値すると見なされなかったことの責任を審査員になすりつけた。「沢山の仕事と、言うもはばかる不愉快な事柄とによって害されてしまった健康を回復すべく、私は 1837 年の晩秋にパリを旅した。ここで偶然私が耳にしたのは、自由貿易と貿易制限に関する——以前すでに示されたことのある——パリの政治科学アカデミーの懸賞課題が新たに提示されたことであった。それに触発された私は、自分の考えの核心について書こうと心に決めた。しかし、手元に自分のこれまで諸作品を持っていなかったためすべて記憶に頼らざるをえなかったから、また私にはこの論文を仕上げるにあたり提出期間の締切までおよそ 14 日間しかなかったから、論文はもちろん不完全きわまりないものにならざるをえなかった。にもかかわらず、アカデミーの委員会は私の論文を全応募論文 27 本中のベストスリーに入れたのである。この結果にはまあ満足してもよかった。というのも、私の論文は荒っぽかったし、また賞はまったく誰にも与えられなかったからである。しかも、全員が世界主義の学派に与した審査委員はそうした思想信条があったにもかかわらずそうに判断したということを見ると、なおさらのことである。」²⁸⁾

ふたつめの懸賞課題のケースについては、そうした正当化の理由付けが存在しなかった。この場合、審査委員会に提出された論文はわずか 2 本であったのみならず——それについてはさらに詳述するが——リストのではない方の論文が受賞した。なのでリストは自分の論文を恥じては何も語らなかったのである。娘のエミーリエはこのタブーを堅守していたから、1847 年 10 月 2 日、最初のリスト伝の著者ルートヴィヒ・ホイサーに宛てた書簡のなかで父につい

28) List, F.: Das Nationale System der Politischen Ökonomie, S. 18 f. [この引用の訳文については小林昇訳『経済学の国民的体系』岩波書店、1970 年、15-16 頁を参照した。ただし訳文はすべて同じではない。]

てこう記している。「科学アカデミーによるひとつの [!] 懸賞課題に触発されて、父はしばらくのあいだ鉄道の仕事から距離をおいて、経済学の領域に没頭していました。」²⁹⁾ [この引用での [!] はすでに典拠において記されている]。それにもかかわらず、ホイサーは彼の手による 1850 の伝記において、リストが「兩作品を完成させた」³⁰⁾ ということをまったく疑っていない。「もちろん、ふたつめの論文に関する確定的な発言はしていないのであるが。」³¹⁾ 「やはり理由として推測できるのは、リストがライプツィヒでもブリュッセルやパリでも実践的な鉄道諸問題すべてに関する第一人者として自分をアピールして、鉄道行政における指導的な役職を得ることに最大の価値を置いていたことである。この領域における学術的な試みの失敗が世間に知れ渡ることにもなれば、そのことはもっぱらライプツィヒにおけるリストの手ごわいライバルによって悪用されたであろうし、ベルギーやフランスの国家の指導的人士や企業家たちのなかにいる自分の友人たちは気分を害しえたであろう。リストには死んでもなお敵がいたほどであった。エミーリエがそうしたことを考慮するようホイサーに請願したと言っても過言ではなかろう。… そのような推測はあくまで推測の域を出ない。というのもエミーリエは別のことでホイサーに請うているからである。… 他の身内の者にも内緒にしていたリストの死に方 [自殺] について伝記のなかで語らないようにすることがそれである。」³²⁾

29) zit. aus Salin, E. und A. Sommer: Friedrich List — Das natürliche System ..., S. 15.

30) Häusser, L.: Friedrich List's gesammelte Schriften; Erster Theil, S. 233.

31) Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Friedrich Lists, S. 690 f.

32) Salin, E. und A. Sommer: Friedrich List — Das natürliche System ..., S. 31 f.

文献一覧

[この (I) の脚注で記されている文献をオリジナル末尾の文献一覧から抽出した]

- Borst, O.: Die heimlichen Rebellen — Schwabenköpfe aus fünf Jahrhunderten, Stuttgart 1980.
- Engels, F.: Zur Kritik der Politischen Ökonomie, in: Marx, K. und F. Engels: Ausgewählte Schriften in zwei Bänden, Band 2, Berlin 1952.
- Fabiunke, G.: Zur historischen Rolle des deutschen Nationalökonom Friedrich List (1789-1846), Berlin 1955.
- Fabiunke, G.: Friedrich List, Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Berlin 1961.
- Gehring, P.: Friedrich List, Jugend- und Reifejahre, 1789-1825, Tübingen 1964.
- Häusser, L.: Friedrich List's gesammelte Schriften; Erster Theil: Friedrich List's Leben, Stuttgart und Tübingen 1850.
- Henderson, W. O.: Friedrich List — Economist and Visionary, 1789-1846, London 1983.
- Henderson, W. O.: Friedrich List: The Natural System of Political Economy, London 1983.
- Koesters, P.-H.: Ökonomen verändern die Welt, Hamburg 1982.
- König Wilhelm I: Schreiben an das Justizministerium vom 15. 4. 1836, Werke VIII, S. 474.
- List, F.: Schriften/Reden/Briefe, Band I-X, hrsg. von Erwin v. Beckerath, Karl Goeser, Friedrich Lenz, William Notz, Edgar Salin, Artur Sommer, Berlin 1928-1935, abgekürzt: Werke.
- List, F.: Das Nationale System der Politischen Ökonomie, Basel—Tübingen 1959.
- List, F.: Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Werke IV.
- List, F.: Das Nationale System der Politischen Ökonomie, Werke VI.
- List, F.: Über den Wert und die Bedingungen einer Allianz zwischen Großbritannien und Deutschland, Werke VII, S. 267-295.
- List, F.: Briefe an seine Frau Karoline, Werke VIII, hier S. 497-503.
- o. V.: Themis, eine Sammlung von staatswissenschaftlichen Abhandlungen, Übersetzungen und in die Politik einschlagenden Rechtsfällen, in: Allgemeine Literatur-Zeitung, Nr. 220, Halle 1824, S. 92-95.
- Salin, E. und A. Sommer: Kommentar zu Friedrich List — Das Natürliche System der Politischen Ökonomie, Werke IV.

- Sommer, A.: Friedrich Lists System der politischen Ökonomie, Jena 1927.
- Sommer, A.: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Friedrich Lists, in: Schmollers Jahrbuch, Band 50, 1926, S. 687-718.
- Weber, G.: Lehrbuch der Weltgeschichte, Zweiter Band, 18. Aufl., Leipzig 1879.
- Wendler, E.: Friedrich List — Leben und Wirken in Dokumenten, Reutlingen 1976.
- Wendler, E.: Friedrich List — Stationen eines wechselvollen Lebensweges, in: Mitteilungen des Instituts für Angewandte Wirtschaftsforschung, Tübingen, 4. Jg., Nr. 3, 1976, S. 11-23.
- Wendler, E.: Das betriebswirtschaftliche Gedankengebäude von Friedrich List — Ein Beitrag zur Geschichte der Betriebswirtschaftslehre, Diss. Tübingen 1977.
- Wendler, E.: Friedrich List — NB-Forscherportrait, in: Neue Betriebswirtschaft, H. 7/1979, S. 417-419.
- Wendler, E.: Reutlingen und Friedrich List, Reutlingen 1983.
- Wendler, E.: Leben und Wirken von Friedrich List während seines Exils in der Schweiz und sein Meinungsbild über die Eidgenossenschaft, Diss. Konstanz 1984.